沖縄県

西表島カボチャ拠点産地認定10周年の歩み

活動期間：平成26年度～令和5年度

概要

○ 西表島（竹富町）は平成26年3月に**沖縄県のカボチャ拠点産地に認定**され、本年で**10周年の節目に当たる**ことから、認定後の産地活動を総括した。
○ 主な活動は、栽培管理面では、**講習会や現地検討会、土づくり、ドローン活用支援、鳥獣害対策等**、販売管理面では、**品種の統一、出荷体制の変更、農家相互による品質管理等**で、全て農家と関係機関の連携により実施した。
○ その結果、高齢化が進む一方で新規ほ場を開墾する農家も増え、産地全体として**出荷量や品質を維持し、市場の信頼を得て販売単価も向上した。**

具体的な成果

1．地域資源を活用した土壌改良

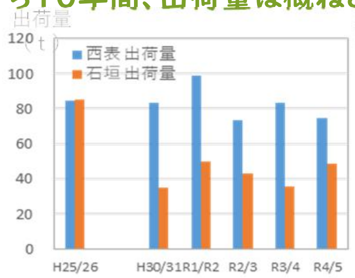
■ 港湾工事で廃棄された**ビーチコーラルの利用による大規模なpH改良**を行い、伐開直後のほ場でもカボチャ栽培が可能に

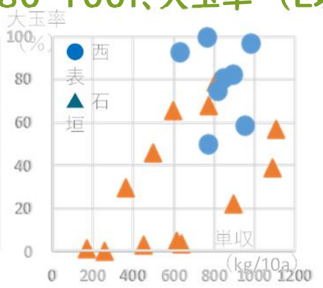
pH分布の推移（H18→H27→R3）

■ **緑肥のW利用（クロタラリア＋ソルゴー）、堆肥のすじ撒き＋マルチ被覆**など少ない資源を活用して地力を高め、ほ場を拡大

2．出荷量及び品質の維持

■ **認定から10年間、出荷量は概ね80-100t、大玉率　（L以上の割合）も7～8割を維持**





3．市場との信頼関係の確立

■ 認定を機に独自の出荷箱を作成。品質管理と相互訪問の継続で**市場との信頼関係を築き、新規バイヤーや仲卸業者と取引を開始。西表島カボチャの認知度を高め単価も約60円/kgアップ**（H30-R4平均）

普及指導員の活動

平成26年～　**土づくり支援**
・土壌分析に基づく土づくり指導
・緑肥、堆肥、マルチ栽培の推進
・ビーチコーラル投入後の土壌モニタリング

平成26年～　**講習会・現地検討会合同巡回指導**
・栽培開始から品種を統一して地域で技術を蓄積
・全ほ場で現地検討を行い活発な意見交換を実施

令和元年～　**農家相互の品質管理支援**
・着果60日後を基準に翌週収穫予定の農家全員で試し切りを行い熟度確認後に出荷する体制を整備

令和3年～　**ドローン活用・鳥獣害対策支援**
・コロナ対策で導入した防除用ドローンの活用支援
・イノシシ対策展示ほの設置と事業導入を支援

令和5年　**拠点産地関連表彰等**

「こふき」
（ナント種苗）

普及指導員だからできたこと

• 産地の要望を踏まえて拠点産地に誘導し、JAや竹富町と連携しながら取組を進めた。

西表島カボチャ拠点産地認定 10 周年の歩み

八重山農林水産振興センター農業改良普及課
活動期間：平成 26 年度～令和５年度

１．取組の背景

西表島におけるカボチャ栽培は、土地改良事業の縮小を補う収益性作物として平成 12 年に試験導入された。当時は単収も単価も低く継続は困難と見られていたが、平成 16～17 年の JA の専任部長による技術指導と市場出荷への移行を契機に栽培が本格化し、部会員 10 名前後と少人数ながら 10ha 規模の産地を形成し、平成 26 年３月に県の拠点産地に認定された。本年度は認定 10 周年の節目に当たることから、認定前後の産地活動とその成果を総括した。

２．活動内容（詳細）

■出荷箱・出荷体制の変更

それまで西表島産と石垣島産は併せて「八重山産」として販売されていたが、西表島産は品質が比較的高くまとまっていたため、認定を機に独自の出荷箱を作り、出荷市場を限定して「拠点産地・西表島産」を強くＰＲした。

■品質管理の取り組み

収穫シーズンは週１回、交配60日後を基本に収穫予定日の近い農家が集まって全圃場で試し切りを行い、お互いの熟度を確認して出荷日を決める体制を整備した。未熟果を防ぐと共に農家自身で熟度を判断する目も養われた。

■品種へのこだわり

他産地が複数品種を導入する中、技術の蓄積と共有がなければ安定生産はできないとして、栽培開始から現在に至るまで一貫して「こふき」（ナント種苗）の栽培にこだわり、部会全員で品種を統一した。

■講習会・現地検討会

講習会で栽培技術や病害虫対策等を確認した後、原則として全圃場で現地検討を行い、部会員相互で助言しあう等、活発な意見交換を行ってきた。

■土づくり

西表島は地力や pH の低い国頭マージや砂質土壌が多く、高温多湿で有機物の蓄積も少ない。畜産農家はいるが放牧主体で堆肥の活用も難しい。そこで、港湾工事で浚渫されたビーチコーラルの活用や緑肥のW利用（クロタラリア＋ソルゴー）、堆肥の筋まきとマルチ被覆など、地域資源の活用や、少しでも有機物を増やし流亡を防ぐ地道な取組により、地力の向上を図った。

■ドローンの導入

大規模農家では令和３年から殺虫剤散布にドローンを活用し、作業の効率化やタイミングを逃さない管理につながっている。

■鳥獣害対策

令和４年頃からイノシシによる踏みつけや掘り起こし被害が増加しており、展示ほや竹富町の事業等も活用して電気柵による獣害対策に取り組んだ。

３．具体的な成果（詳細）

■土壌改良

平成 18 年にはカボチャ栽培に不適な pH６未満の圃場が 33％あったが、ビーチコーラルの投入等により平成 27 年は 15％、令和３年は９％に減少した。令和３年は逆に pH が高すぎる圃場が増えてしまったが、毎年土壌分析を実施して経過を確認しており、少しずつ適正値に戻りつつある。また腐植（≒有機物含量）や CEC（保肥力）も、僅かずつではあるが改善が見られている。

■出荷量、品質、単価の維持向上

石垣島に比べ平均単収は常に 100～200kg 高く、大玉率（Ｌサイズ以上）も７～８割を占め、大玉でまとまった品質のカボチャを出荷し続けている。高齢化により農家数はやや減少したが、出荷量は認定時から概ね 80～100ｔを維持しており、単価は認定時に比べキロ当たり約 60 円増加した（H30-R4）。

■市場との信頼関係

拠点産地認定から 10 年間、市場担当者にはほぼ毎年産地を訪問頂き、新たなバイヤーや仲卸業者を紹介頂き、小売業者に「津嘉山産より西表島産が欲しい」と言われるまでに認知度を高めることができた。市場と強い信頼関係を築き「箱の中を見なくても売れる」と言われるようになったこと、西表島カボチャのファンを増やせたことが何よりの成果と言えるだろう。

４．農家等からの評価・コメント

（竹富町（西表島）Ａ氏）

始めは農家の意向とは無関係にカボチャが導入され、栽培に適した土地もほとんど無かったが、専任部長との出会いやビーチコーラルの利用で栽培に自信がつき、町や県のバックアップもあってここまで来ることができた。

カボチャは消費者に届いた頃にちょうどおいしくなる。離島ゆえの不利性が小さくこれからも無くしたくない品目。今後の島の農業を考えるとさとうきびだけでは不安もある。一人でも二人でもカボチャ栽培に興味を持ってもらいたいし、そのためのバックアップを今後もお願いしたい。

５．普及指導員のコメント

（八重山･農業改良普及課・主任技師・山口綾子）

西表島カボチャは拠点産地認定時も担当しており思い入れの深い産地。条件的には決して恵まれた産地ではないが、農家の皆さんの実直な努力が拠点産地認定を契機として市場の信頼につながり、安定販売につながってきたことを心から嬉しく思う。次の課題は新規農家育成に尽きる。より難しい問題だが、全関係機関で同じ方向を向いて農家の努力に応えていきたい。

６．今後の課題等

■新規農家の育成　　■収量の安定化　　■獣害対策

■生産資材・輸送費の高騰　　■集荷場・輸送船舶の老朽化